

氏名	金田 法子
学位	博士
専門分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 4872 号
学位授与の日付	平成 25 年 9 月 30 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	ジョイスの戦争 短篇集『ダブリンの市民』の中の作品、「姉妹」・「恩寵」 に見る教会批判
学位論文審査委員	主査・教授 金関 猛 教授 剣持 淑 准教授 西山 康一 法政大学教授 結城 英雄

学位論文内容の要旨

ジェイムズ・ジョイスがローマ・カトリック教会から離反したことは、作者本人も公言しているし、その動機についても作品で描かれているが、しかし教会への対峙という観点からの作品論はこれまでほとんどなかった。本論文はそうしたジョイスの教会批判の姿勢を「ジョイスの戦争」という観点からその作品に読み取った優れた考察である。なお、本論文は序章と終章を挟み、全七章より構成され、以下のとおりである（節は省略）。

序章

第一章 先行研究

第二章 文学作品と文学手法

第三章 「姉妹」に見る教会批判

第四章 「恩寵」に見る教会批判

第五章 近代アイルランド史とジョイスの「二人の主人」

第六章 ジョイスの生涯〈1〉— 誕生から大学卒業まで

第七章 ジョイスの生涯〈2〉— 大学卒業から生涯を終えるまで

終章

ジョイス年賦

文献目録

序章では、ジェイムズ・ジョイスの作品の底を流れる「教会批判」という問題についての着想を手短かに概説し、本論文のその後の展開についての方位を述べている。

第一章「先行研究」においては、これまでのジョイス研究の流れを概観し、アイルランド人作家としての視点からの考察が開始された経緯をなぞり、ジョイスの文学の本質を読み取っている。

第二章「文学作品と文学手法」においては、ジョイスの「意識の流れ」もしくは「内的独白」という手法と本論文との関連を論じている。

第三章『「姉妹」に見る教会批判』は、短篇集『ダブリンの市民』の冒頭の作品「姉妹」の詳細な分析であり、その教会批判をとおして、ジョイス文学の発端を論じている。

第四章『「恩寵」に見る教会批判』は、短篇集『ダブリンの市民』の巻末として想定された「恩寵」をめぐる、「姉妹」と同じく教会批判を読み取っている。

第五章「近代アイルランド史とジョイスの『二人の主人』」においては、アイルランドにおける大英帝国の植民地支配、ならびにカトリック教会の支配を論じ、ジョイスにとっては後者が何にもまして国民の敵であったことを論じている。

第六章、および第七章においては、「ジョイスの生涯」へと転じ、ジョイスの教会批判の背景や教会批判が醸成されるにいたった過程について、学校教育を中心に論じている。さらに大陸を移り住みながら、ジョイスが教会批判を作品へと結晶させる期間を論じている。

終章はこれまでの論考の要点を手際よくまとめ、教会批判をめぐる本論文をさらに広い視点で論じようとする今後の課題が述べられている。

学位論文審査結果の要旨

審査会は、平成25年7月1日(月)13時30分から15時30分まで、文学部会議室(1号館2階)において、主査金関猛、副査剣持淑、同西山康一、招聘教授結城英雄の4名の審査委員によって行われた。まず金田氏より、学位論文の内容について、10分程度、口頭で説明がなされた後、約2時間、審査委員による質疑応答及び講評を行った。活発な質疑応答がなされるなかで審査委員から次のような見解が表明された。

本論文は、短篇集『ダブリンの市民』の巻頭と巻末の二つの作品、「姉妹」と「恩寵」を取りあげ、そこに認められる教会批判を細大漏らさず論じ、「麻痺」という『ダブリンの市民』に対するこれまでの紋切型の評価に対して、教会批判というジョイス文学の本質を剔抉した極めて貴重な画期的な論考である。その成果は以下のように纏められる。

1. ジェイムズ・ジョイスの文学はダブリンという都市を前提とし、自伝的な要素を織り交ぜながら、物語を構築していった。言い換えるなら、ダブリンという都市に物語を貸し与えたといってもいい。そうしたジョイスの文学の特徴を徹底的に追及したのが本論文であり、ダブリンの地誌やアイルランド史を緻密に検証し、ジョイスの教会批判を探った力作である。

2. 「姉妹」も「恩寵」も『ダブリンの市民』に収められた短篇として、都市の麻痺の症例としてこれまで論じられてきたが、それぞれの背景をなす聖キャサリン教会や聖フランシスコ・ザビエル教会についての調査を徹底し、曖昧に論じられていたこれまでの『ダブリンの市民』に関する認識を深化させ、麻痺というテーマの根底をなすジョイスの教会批判を明らかにした功績は大きい。その資料は後続の研究の進展に寄与することであろう。

3. ジョイスの教会批判という着想を追求しながらも、先行研究を精査し、文学的手法と関連づけ、さらに生涯についての考察も怠ることなく、自らの視座を広い視野で展望しようとした意義深い論考である。渉猟した数多くの文献の一覧も今後の研究者にとって裨益するところが大きい。

4. 現地を調査する過程で入手した写真なども議論に説得力を添え、既成の論述を見直す十分な資料になっている。ジョイス文学を研究する今後の見事な範例でもある。

本論文はこのように多くの点で瞠目に値する研究であり、学界に寄与するところきわめて大である。対象とする作品が初期の作品に限定されている嫌いはあるが、『ダブリンの市民』はジョイスがアイルランドの読者を意図した最初の作品であり、祖国を舞台とするその後の作品についての目配りもあり、そのことで論考の意義が損なわれるものではない。

こうした肯定的な評価に対して、全体として、叙述が並列的で、幾分平板であり、中心的な論点に向かって考察を進める構築的な論述が求められるということが難点として指摘された。また、教会批判をするジョイスが神への信仰は捨てたわけではないので、ジョイ

スにとっての神、宗教といった観点をさらに追求すべきではないかという意見、また、より厳密な実証研究が必要なのではないかという意見、さらに誤字脱字が多いといった意見が表明された。

以上により、いくつかの難点は含みつつも、審査会は、本論文が博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認め、全員一致で合格と判定した。